

研究

猪垣の築造と灰床の開発

羽出浦庄屋古文書により考察

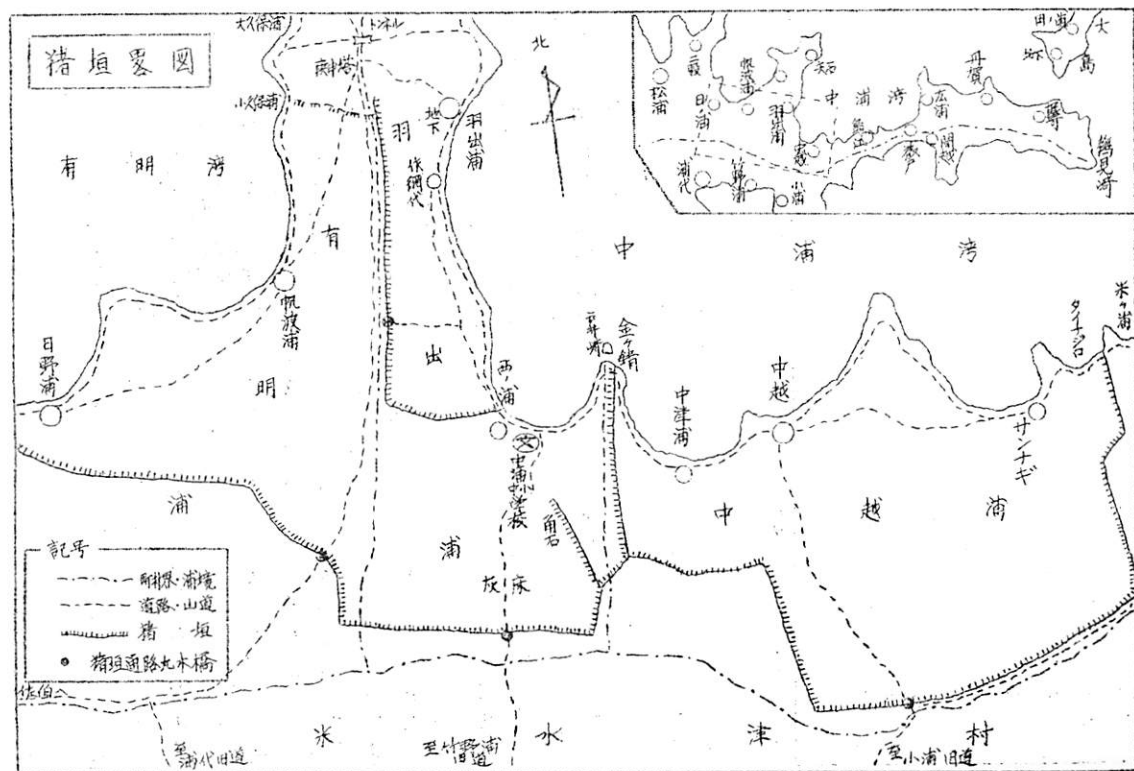
賛助会員 安部 弥古 衛門

鶴見半島の尾根や山腹に、蛇蛭と設けられている一連の猪垣は、常に萬里の長城を連想せしむるものがある。これは鶴見半島に住む農氏が、猪や鹿の被害に苦しむのを見て、毛利藩が猪垣を築造したもののようである。然し築造年代がいつであつたか、前後に従つた人夫は受益地内の農氏だけであつたか、人夫に対する給与はどうかであつたか、なども不明である。

もつとも藩政末期の頃と思われる工事では、羽出浦地内の場合、人夫一日につき弁当米として、玄麦七合を支給し、中越浦では米七合を支給したとのことである。当時の農氏の食生活から考えて、これも米ではなくて玄麦ではなかつたかと思われる。また丹賀浦では現金給与であつたと古老から聞いたことがある。

第一期工事と思われれるものが最も大規模である。(地図)

先づ日野浦の村は、山腹の斜面を上り、帆波浦と羽出浦の境を尻取伝いに、上山の七八合目位の迄まで登り、方向を南に転じて戸の上、高瀬ヶ谷灰床の上方の山腹を横切り、竹野浦越の道を越えて中津浦山との境まで出、そこから戸井崎の尻取伝いに北に向つて下り、灰床台地の東は、これで分岐し、



一線は尾根の西側を前石の谷間に下り、他の一線は尾根の東側斜面を中津浦の釜床まで下り、また分岐して一線は山の中腹を北に伸びて金ヶ錯のはずれに達する。これで日野浦、帆波浦、鵜浦、羽出浦の周りを囲むことになる。

別の一線は、釜床から大蔵山の山腹を末の方で横切り谷間に達した後、山の斜面を上の方に登って高諸山に達し、更に氷水津村との境界線にある小浦道に出、それから鳴江に通ずる山頂の山道沿いに中越のサンナギの上を過ぎて綱網代か山頂に達し、そこから左に折れて山々斜面を綱網代か山麓まで下り、更に耕地と廻って海岸近くまで伸びている。つまりこの猪垣は、中津浦、中越、サンナギ、綱網代の地域の耕地を囲んでいる。

右の外に、嶋江、猿戸、広浦、丹賀浦、根寄浦を囲んでいる猪垣があるが、老令の私はその一々の調査はしていない。

この外、羽出浦と鵜浦とを囲む、内堀とも見られるかなり大規模な猪垣がある。これは江戸時代末期の工作のように開いているが、羽出浦の西野浦マダベ谷の、谷間から山腹を上って、羽出浦と帆波浦の境界線である尾根に達し、尾根に通じていた旧浦代―木立―佐伯道路に沿って稍北寄りの方向へ、そしてヨソイ谷、コドウ、作網代の上を経て地下の上で止まり、そこから又一線の猪垣が方向を西に、山々斜面を稜線と小久保浦の東側に下り、海浜近くまで下っている。この猪垣によつて、羽出浦と鵜浦は二重に囲まれたことになる。

この外に最寄々々で、又は個人単独で造つたと見られる、小規模な猪垣もあちこちにある。今は野上山も山道も、雑木や雑草に掩われて猪垣を遠

望することほどできないが、昔シダカム生えていた頃の昔の猪垣の遠望は、実に壮観であった。

然し今や時代は変つて、僻地の農業村は過疎に一つ過疎で、現在では農地を耕作する人はなく、山の段々畑は言うまでもなく、里の菜園までも雑草の茂るに任せている。むかし村の荒地を、猪や鹿の侵略から守つてくれた重要な猪垣も、今は無用のものとなり、唯一の文化財として自ら慰めていたもの、これを築造した年代については、未だ記録も発見されず、確かな傳承も残っていないのは残念である。

一体、この猪垣はいつ、どのようなして築造されたものであるか、毛利藩の古文書がまだ多数所蔵されているとのことで、これに希望を托しているが、その古文書が解読されて一般に発表されるのは何年先のことか。或は地元か鶴見所かどこかに、猪垣築造の年代を知る端緒となるような古文書が所蔵されていないかと、私かに考えることが屢々である。

然るといふ、羽出浦庄屋古文書の中に、次のような文書がある。

奉願口上書

羽出浦 文 蔵
典 吉
儀 助
満 五 郎

右之者当浦百姓共之内極々難蓋仕地所等皆無御座の者ニ而当浦之内灰床と中所は開地仕度奉存勿論古場所以前開地ニ而芋作等仕付不得共何分猪鹿多作毛

あらし小故其保檢置神座外延此度書面之者共開地仕
申度尤右場所人家分式拾五折程も相隔居外ニ付御
屋迄軒へ、造作仕度奉願外古願之趣被為 仰付被下
外は、難有仕合可奉存外依奉願外延如件

嘉永六年十月二日

庄屋 重左 衛門 吉
地目付 友
頭百姓 諸右 衛門

建 上

領し新割方御役所へ願書差出ス

(註) 一 灰床はその領番主の所有する原野であり、農氏に屋
根を葺く等の刈取りを許していた。

(註) 二 畑地は、今西野浦にある中浦小學校から一五〇米程屈折した坂
道を登ったところの台地で(地回参照)且て開墾していた畑

は傾斜が急な段々島でなく、長さも中も広い、肥土が深い

上畑が幾ヘクタールかあったが、今は荒れぼてて大部分

は植樹されている。畑地の上端から山頂にある猪垣まで

は二百米近くあり、この辺りは急傾斜にまつている。

羽出浦から竹野浦に越える旧道はこの灰床の真中を通

(註) 三 畑地の程よい所に一坪ほどの小屋を作り、毎夜この小屋に寝

泊りして、時と大音を発したり、鳥子の縄を引いたり

して猪を追うていた。

右の願書によれば、嘉永六年より何年か何十年か以前
に、十でに猪垣は出来ており、猪や鹿の害はなにもかと
して開墾し農作していたのであらうが、何処からともな
く猪や鹿が侵入して被害が絶えなないので、折角の開墾地
もまた前の荒地になつていゝるので、令度はもう一度開墾
て、めいめい猪番小屋と畑地に建て、管理を十分にす
る。と云うのである。

始め私は、享保年代の羽出浦の斬敷、耕地面積などの
実態と、其の後の明和、安永、天明年代の千代つ、飢饉、
悪疫流行の実状及び天保年代の経済事情などから見て、
「鶴見半島の猪垣」の内、この辺りは天保年代から安政年
代までの期間に築造されたのではあるまいか、との推
測をしていたが、この文書によると、嘉永六年以前に既
に灰床に開き地が出来て、それが荒地になつていたので、
従つて嘉永年代以前に既に猪垣が出来ていたことにはなる
つまり、日野浦——羽出浦辺りの猪垣は天保、弘化年代
には既に出来ていたのではあるまいかと思われる。

私が初めて灰床に登つたのは、幾十才位の明治三十年頃
であつた。當時は大西重四郎さん老夫婦が住んでいた。

古いながら広い平家建築が住居であり、宅地は広く

百五十坪以上はあつたであらう。家の東は竹やぶと杉の

防風林、北は竹林、西側には数基の墓碑があり、家の軒

先より土高が及かん地柿、梅などの大樹が何本があり、

屋敷の南側には、枝は風に吹き曲げられ、幹は空洞にな

つた杉の大樹が一列に並び、五、六十年以上と経た樹令を

思わしめるものがあつた。

外は二、三軒小さな家もあつたが、昭和年代の初期

には皆山を下り、今は家も耕地も全くなく、左は猪垣の

及び残つていゝばかりである。

(完)

(お断り)

苟且の資料をもつて、遠い年代の考察を試みるは軽

卒の責任を感ずるが、鶴見半島の猪垣という特異な

民俗資料、農民の遺産を、これを契機として有識の

方々から探究して頂けたら、その端緒ともなれはと

存じ、敢て貴重な紙面を塞ぐことには次第であ

る。諒とされたい。